



第71回日本PTA全国研究大会



広島大会

変化の時代に向け、PTA自身が学びの変革を！
～見つけ 考え かわろうや ぶち楽しいで！！～
広島から全国へ

2023.8.25 - 26

Report



長野県PTA連合会



子供の力を引き出す家庭教育のあり方 ～自己肯定感を高め、可能性にチャレンジする子供を育てるために～

《提言者》

●基調講演者

大日向 雅美 氏
恵泉女学園大学 学長

●実践発表者

米田 珠美 氏
広島府中町
家庭教育支援チーム『くすのき』 代表

●コーディネーター

高杉 良知 氏
文部科学省生涯学習政策局 元社会教育官

●パネリスト

里本 佳子 氏
広島県立生涯学習センター 所長

米田 珠美 氏
広島府中町
家庭教育支援チーム『くすのき』 代表

水野 達朗 氏
大阪府大東市教育委員会 教育長

藤井 智佳子 氏
NPO法人あっと 代表理事

基調講演では「今、子どもを育てるということ」と題して、恵泉女学園大学学長の大日向雅美先生のお話を伺いました。

「子どもを育てるとは、

- ①子どもを“人として”尊重すること
- ②親と共に生きること
- ③地域と共に生きることである

大日向先生は、1970年代から子育てに悩み揺れる母親たちと関わってきました。その経験から、上から手を差し伸べる「支援」ではなく、傾聴と理解（下に立って支える）の心で「寄り添う」ことの大切さをお話されました。

また「地域と共に生きること」とは、分かち合いの共生社会へみんなで「子育て・子育て」を支えることであると、子育てひろばを運営する「NPO法人あい・ぼーとステーション」の取り組みを交えてお話しされました。

最後に「今の子どもたちは将来や未来について考えることが多いが、今を丁寧に生きること、目の前のことに対して一つひとつ大事に取り組むことが大切である。そして、社会のみんなを信じながらみんなで手を取り合い、まずは親が幸せに生きてほしい」と語られました。その言葉が非常に心に残っています。

実践発表では、府中町家庭教育支援チーム「くすのき」代表の米田珠美氏より「府中町子育て『地域全体で子育て・親育ち応援!!』～地元を愛し、お互い元気になろう～」と題して、行政やほかの団体と連携しながら家庭教育支援をしている取り組みについて発表がありました。

最後のパネルディスカッションでは、

- ①これからの変革の時代を生きる子どもたちに必要な力とは
- ②子どもに自己肯定感を持たせる家庭教育のあり方
- ③行政その他による家庭教育支援の現状

について、討議されました。

子どもに必要な力として「どんな環境でも前向きに生きる力」「自己を認識し選択していく力」「失敗してもあきらめずに挑戦する力」などが挙げられました。

また、家庭教育は一人で悩んで行うものではなく、いろんなところに支援の輪があるのでその情報をキャッチし、親が学んでいくことが大切であると、パネリストの方よりお話がありました。さまざまな立場からの意見があり、とても興味深く参考になりました。

大日向先生のお話、実践発表、パネリストの皆さんのお話から家庭教育のヒントがたくさん得られました。この学びをしっかり持ち帰り生かしていきたいと思います。

(長野市PTA連合会 副会長 小林優さん)

《提言者》

●基調講演者

小熊 広宣 氏
NPO法人全国不登校新聞社 事務局長

●実践発表者

行廣 真由 氏
広島県熊野町立熊野中学校 教諭

松本 美奈子 氏
広島県三原市立久井中学校 教諭

●コーディネーター

栗原 慎二 氏
広島大学大学院 教授
公益社団法人学校教育開発研究所 代表理事

●パネリスト

小熊 広宣 氏
NPO法人全国不登校新聞社 事務局長

桑原 健太郎 氏
広島市民病院 小児科 部長

渡邊 美佳 氏
広島県教育委員会事務局学びの革新推進部
個別最適な学び担当 不登校支援センター長

「『不登校の子どもの気持ち』から考える、周囲の大人にできること」と題し、NPO法人 全国不登校新聞社 事務局の**小熊広宣**先生のお話を伺いました。

今の日本における不登校についての現状やその原因、不登校の気持ちや対策について、かなり濃い内容でした。

- ・令和4年度全国不登校者数：24万4940人(※) → 9年連続で増加している
- ・不登校者の内訳：小学生8万1498人(※) 中学生16万3442人(※) 隠れ不登校者もいる
- ・不登校の原因は、先生(怖い、暴力)、いじめ(友達のこと)、身体の不調などたくさんある。
- ・多くの子どもは、なぜ不登校になってしまうのかをうまく説明できないことがあり、きっかけが何か自分でもよくわかっていない。

(※) …… 全国不登校新聞社調べ

💡 子どもは親に対して「助けて」のサインを必ず送っているのです、日頃からどんな些細な変化でもいいので子どものことを気にしてほしい。

〈不登校の子どもの状態像〉

	子どもの様子	心の元気度
第1段階	・学校へ行き渋る ・起きられない	(初期) かなり低い
第2段階	・ゲーム三昧 ・完全に学校へ行かない	(葛藤期) 自分を一番責めている時期
第3段階	・精神的に安定してくる ・食欲が出てくる	(充電期) ポジティブ感が出る
第4段階	・好きなことやりたいことへの準備を自ら始める	(始動期) 学校に行かなくても大丈夫という気持ちが芽生える

〈3つの基本姿勢〉

- ①「今の子どもの気持ち」から考える
今がとてつらいんだと、気持ちを受けとめてほしい。
- ②対応は足し算ばかりではなく引き算もある
- ③正解はないけど不正解はある

💡 成功談より失敗談を大切にすることが重要！

〈不登校経験者が語る三大NG対応とは〉

- ①家庭訪問 → 先生に会いたくない
- ②お手紙 → 精神的につらく、恥ずかしい
- ③不登校の原因 → 探さないでほしい

次頁へ続く

〈不登校時の対応～大人にできることは何か？〉

親だってつらいのです。特に母親の場合は、子育てが失敗だと親族に言われたりする。同級生の子との比較や、ママ友に会わないように買い物なども遠くに行きがちになる。対応は「同じ経験をした親と話す」こと。不登校の会に参加したり、NPOなどの支援団体に相談したりする。

〈親にできることは何か？ 絶対やるべき5選〉

- ①子どもにとって安心する場所をつくる
- ②子どもの話は最後までちゃんと聴く
- ③「ほめる」ではなく「喜ぶ」
ほめることは上から目線の行為に感じてしまう場合もあるので、子どもが思春期になってくると難しい。
- ④「親がやってはいけないこと」をしない
学校に行ってほしいオーラを出す・学校の資料を見せる・同級生の話をする・子どもを理由に自分の好きな趣味をやめる
- ⑤「ヒマだな～」の言葉を見逃さないこと
子どもが動き出す際のサインのひとつ。家でゆっくり休んでいると、子どもが元気を取り戻していく過程で必ず「ヒマだな～」と言う。

実践発表では熊野中学校の行廣真由先生、久井中学校の松本美奈子先生の取り組みである「SSR(スペシャル・サポート・ルーム)」の運営を通じて感じた不登校傾向の支援について発表されました。

学校には来られるけど、教室でみんなとの団体行動が難しい子などに向けた「レンゲルーム」と呼ばれている、独自の教室での取り組みです。「行きたいときに行かれて、無理なときは行かなくていい」「授業はフリースクールとは違い、生徒の意志を尊重して日程を作っていく」などの工夫がありました。また、SSRだけの運動会があり、生徒たちで考え、実行力をつける取り組みがあるそうです。

問題点として、人数が増えると目が配れない、生徒は意外に学校の日程を気にしているなどの課題があると仰っておりました。

パネルディスカッションでは、コーディネーターとして広島大学大学院の栗原慎二教授を迎え、不登校についての問題を提起されました。また、パネリストとして3名の方のご意見をお聞きできました。

桑原健太郎先生（広島市民病院 小児科部長）は「不登校の子を診察すると、昼夜逆転生活の子が多く、頭痛やメンタルがやられていることがある。肉体的に不安を取り除いてあげることが、病院でできることだ」などと話されました。

渡邊美佳先生（広島県教育委員会事務局 不登校支援センター長）は「県と学校が協力し、不登校の子やSSRに通っている子に対してサポートしていくことが最重要。子どもたちが安心して成長できる場所を、これからもつくっていく」と話されました。

小熊先生は「不登校になってしまった個人について不登校だから悪いことをしているとイメージがついてしまう。不登校になった瞬間に《自分は人としてだめだ》と思う子が多い」と話し、不登校の子どもをもつ親に対してのアドバイスとして「親の直感は合っているから大事にしたほうがいい！親の願いは捨てる。親の願いは、子どもにとってはかなりのプレッシャーになる」と語られました。

不登校がテーマの分科会でしたが、私自身も不登校を経験しているので、先生方の話に共感することがとても多くありました。また、当時の私は不登校の自分がかわいそうと思っていましたが、今振り返ると本当に辛かったのは母親だと思いました。

不登校になると普通の人より劣ってしまうと感じることもあるかもしれませんが、それをバネにして前に進む気持ちを常にもつことが大事だと考えさせられました。

（長野県PTA連合会 副会長 荒川博之さん）



学校教育と地域の連携をどう進めていくか ～子供の成長を地域と共に～

《提言者》

●基調講演者

山川 肖美 氏
広島修道大学 教授

●実践発表者

立石 克昭 氏
広島県府中市
コミュニティスクール連絡協議会 会長

●コーディネーター

山川 肖美 氏
広島修道大学 教授

●パネリスト

原 完次 氏
島根県PTA連合会 元会長

立石 克昭 氏
広島県府中市
コミュニティスクール連絡協議会 会長

梅谷 友美 氏
鳥取県倉吉市立関金小学校PTA 副会長

「地域とともにある学校ーシビックプライドによる架橋ー」を演題に、広島修道大学教授の山川肖美氏よりお話がありました。

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）において、保護者の学校への意識や地域の学校への関与と参画を目指すなか、保護者も先生方や活動の協力者と平等な立場で運営に参加し、そのつながりの中で仲間を増やしていくことが大切だと、山川氏はおっしゃっていました。

私は、演題にある『シビックプライド』という言葉は初めて聞き「何のこと？」と思いました。

- ・都市に対する市民の誇り
 - ・地域をよりよい場所にするために自分自身関わっているという自負心
- これを『シビックプライド』というそうです。

例として、麻で有名な古市という街の話がされました。ある大学生が古市の魅力を広めようと小学生と共に冊子を作ったところ、1年後には「マップを作り、古市のよいところや面白いところを散策しよう」と活動が広がり、そこに先生や保護者も加わっていき、それを見ていた在住歴30～50年の住民たちが参加しはじめ、地域の3世代のつながりになったということです。

最後に山川氏がおっしゃったことは「皆で見つける！小さく生んで皆で大きくする！」。その通りだと思い、聞き入っていました。

実践発表では「地域の中に学校を 学校の中に地域を」と題し、広島県府中市コミュニティスクール連絡協議会、会長の立石克昭氏による発表がありました。

府中市明郷学園（小中一貫校）では、キャリア教育の推進で地域企業が教員のサポートを行い、7、8年生で模擬会社を作り、生徒が経理、販売、総務を分担してイベント等に参加しているそうです。

「大学生や先生はいずれ去っていくので“風”、地域や在住者は“土”である。“風”と“土”で子どもたちを育てていくことがとても大切だ」その言葉が心に残りました。

私は、中学校のバレーボールに外部コーチとして15年間携わっております。“土”として子どもたちを育み、よりよい地域連携ができるようにしていきたいです。

（木曾郡PTA連合会 会長 高橋龍輔さん）

《提言者》

●基調講演者

石川 結貴 氏
ジャーナリスト

●実践発表者

上野 和子 氏
NPO法人ひろしまチャイルドライン
子どもステーション 理事長

●コーディネーター

小島 由香 氏
安田女子大学 教育学部児童教育学科 准教授

●パネリスト

前原 一教 氏
広島県東部こども家庭センター 所長

上野 和子 氏
NPO法人ひろしまチャイルドライン
子どもステーション 理事長

岡本 晴美 氏
NPO法人CAP広島 理事長

「孤立と虐待のない街づくり ～傷つく子どもを支えるためにできること～」と題し、ジャーナリストの石川結貴氏が講演されました。

児童虐待をはじめとする子どもを取り巻く諸問題や、親が子どもを精神的に支配したり、親の期待に沿うように強制したりするような新しいタイプの虐待行為など、子どもたちを取り巻く環境が一層複雑化していることを学びました。

- ・現在の子どもたちの「つながり」は、学校や地域の友達のほかに“LINE”や“X(旧Twitter)”などのSNS、声で会話するトークアプリ等を使い、見知らぬ人ともやりとりしている。相手からチップ(ポイント)をもらい、獲得数に応じてギフトカードと交換できる仕組みもあるなど、容易に性的虐待等につながってしまう環境が身近にある。このような子どもを取り巻く環境について、親の知識が追いつかないという問題点もある。
- ・経済的な不安定さ、家族や親族等との断絶、社会性への乏しさなどにより、社会的な「つながり」の機会を失う親も多い。当事者からの申請に基づく支援体制では、行政システムの狭間にこぼれ落ちてしまう。周囲と「つながれない親」は、そもそも支援があることを知らない(情報弱者)、支援は知っていても手続きができない(能力不足)、支援者が怖いと思っている(一方的に善意や正論を押し付けられることへの抵抗感)、支援の枠に押し込められたくない(生活上の指導や注意をされることへの抵抗感)という傾向があり、状況が危機的になるほどSOSを出せなくなる親も多い。
- ・虐待防止のための「支援」には、専門的な支援と一般の人でもできる支援がある。予算や人員が限られる行政だけに任せるのではなく、市民がそれぞれの力を出し合うことで新たな子ども支援が可能になる。困っている人がいたとき、自分の思い込みや一方的な視点だけでは、支援を必要とする人と真につながることはできない。支援を必要とする人たちの気持ちや生活を想像し、新たな道を切り拓くための方法を探ることが大切になる。

支援にあたって重要となるのは、想像力と行動力、そして突破力。まずは、親が子どもたちを取り巻く現状を正しく知り、地域や学校においていわゆる「迷惑な子・変わった子・困った子」とされている子に関心をもち、対応をしていく「支え」の基盤づくりが必要なのではないかと、この課題提起がありました。

次頁へ続く

パネルディスカッションでは行政・民間それぞれの立場から、子どもたちの尊厳を守り虐待被害等をなくすための取り組みについて、討議がされました。子どもたちに対する大人の支援で大切な視点を学ぶとともに、改めてその支援の難しさを感じました。特に印象に残ったのは次のことです。

- ・子どものことは子どもに聞かねばわからない。忙しくても耳を傾ける習慣を常に心がける。
- ・子どもの話をまずは聴く。大人の視点で解釈したり、言い換えたりしないで、グッと我慢して聴く。その上で、解決方法を共に考える。
- ・子どものSOSを受け止めるためには、気持ちを素直に聴いて子どもの「今」を知ることが重要。子どもが安心してヘルプできる環境づくりを。
- ・子どもにとって「相手に伝わった」「自分の言葉で語れた」という実感が大切。うまく伝えられずに失敗するのを見届けてもいい。
- ・自分を大切に思えない子どもは他人も大切にできない。子どもの頃に“大切にされた”実感がある子は、将来自分の子どもに対しても大切にできる。親に“自分の話を聴いてもらった”と実感をもつ子は、必ず「自分の子の話を聴いてあげたい」と思うようになる。こうした連鎖がよりよい家庭環境や子どもの育成環境を築いていく。
- ・子どもも地域をつくるパートナーとして認識する。
- ・子どもを虐待や社会困難から守るためには、子どもと親が「共通の課題認識」をもつことが大切。子どもが知っていることに親も関心をもつことが必要。

虐待のない社会を作ることや子どもの健全育成を推進するためには、個々の親が「子どもが安心して話ができる環境」をつくっていくこと、それが最重要だと感じました。それを地域や学校へと広げ、社会全体で子どもたちに関心をもって耳を傾け、子どもたちを社会形成のパートナーとして守り育てていくことの大切さを、改めて実感しました。

（上高井郡市PTA連合会 会長 池上健一さん）

《提言者》

●基調講演者

道佛 一郎 氏
株式会社インフレックス 代表取締役

●実践発表者

竹内 淳子 氏
香川県立高松北中学校・高等学校PTA広報委員

尾原 佐知子 氏
香川県立高松北中学校・高等学校PTA監事/広報委員

●コーディネーター

高橋 巨樹 氏
日本教育新聞社 編集局 記者

●パネリスト

道佛 一郎 氏
株式会社インフレックス 代表取締役

山田 洋子 氏
公益社団法人日本PTA全国協議会 元副会長
広島県PTA連合会 元副会長/広報委員長

久保木 要 氏
中国新聞社備後本社 代表補佐 兼 編集部長

竹内 淳子 氏
香川県立高松北中学校・高等学校PTA広報委員

「思いや考えを伝えるための方法 ～結果を伴う広報活動のために～」と題し、株式会社インフレックス代表取締役の道佛(どうぶつ)一郎氏が講演されました。

道佛氏は広島ホームテレビに従事後、映像や印刷物などの制作を手掛ける会社を興しました。お子さんの学校のPTA役員として、広報に携わったこともあるそうです。その経験から、人の心を惹きつける伝え方について話されました。主な内容は次のとおりです。

【広報の考え方】

- ①PTAが広報活動を行う目的
 - ・「効果的」に思いや考えを伝える
 - ・「効果的」に活動を記録として残す
- ②一度では伝わらない
 - ・人は3回目から心が動くので何度も伝えることが大切
 - ・心が動く過程は人によって段階があるのでいろいろなアプローチが必要
- ③全部伝える必要はない
 - 《理由》・反復継続して発信するため
 - ・場面に応じた広報を行うため
 - ・目的達成には不必要であるため
 - ・全てを伝えても理解してもらえないため
 - ・短いメッセージのほうが効果的であるため
- ④何を主題として伝えるか
 - 広報の手段/目的
 - ・学校行事やPTA活動の紹介/活動への理解
 - ・活動予定を知らせる/積極的な参加を促す
 - ・実績の記録/今後の活動の参考にする
 - ・コンクール入賞/伝える技術とモチベーションの向上

【広報紙の作り方】

- 一番伝えたいことを大きく載せる。
- 日常で目にするチラシや広報紙を真似してみる。
- Webサイトやソフトのテンプレート等を参考にしたり、活用したりする。
(Pinterest、Canva等)
- 言葉や文字の表記に注意する。

私は単P時代も含めて長年広報に携わってきましたが、再認識することも多く、大きな学びとなりました。子どもに直接関わる活動ではありませんが、家庭教育や知識教養の向上のため、よりよい情報をお届けしていきたいです。

(長野県PTA連合会 情報発信部 森山奈々)

《提言者》

●基調講演者

あんどうりす 氏

兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 博士課程
アウトドア防災ガイド

●実践発表者

福本 和雄 氏

広島県三原市立第一中学校 前校長

●コーディネーター

瀧本 浩一 氏

山口大学大学院 創成科学研究科 准教授

●パネリスト

あんどうりす 氏

兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 博士課程
アウトドア防災ガイド

香川 恭子 氏

特定非営利活動法人ひろしまNPOセンター 理事

五十嵐 智浩 氏

公益社団法人日本PTA全国協議会 監事/元副会長

福本 和雄 氏

広島県三原市立第一中学校 前校長

最近のさまざまな災害は甚大化や広範囲に及ぶ傾向にあり、常に私たちの身近で起こり得ること、地域防災の重要性は議論されているが学校とPTAの役割として議論される機会が少ないこと、これが第6分科会に参加した理由です。

「学校で学ぶ知恵は、すべて防災で役立つー親子で楽しく身につけ、地域を安全にする方法ー」と題し、アウトドア防災ガイドのあんどうりす氏の講演が行われました。

基調講演では、防災の知識を学ぶというよりは、日常での少しの工夫の積み重ねが防災教育につながる、そのような印象を強く受けました。

- ・子どもが使う水着バッグは物を濡らさずに持ち運びができ、緊急避難時の貴重品入れに活用できる。
- ・荷物をリュックに入れる際は、重いものを高い位置にすることで移動時の負担を大きく軽減できる。

など、このような子どもたちにもわかりやすい簡単な工夫ばかりで、驚きの連続となりました。

続いて行われたパネルディスカッションでは、西日本豪雨で被災した中学校においてPTAが行った活動と、その際に浮き彫りになった課題の紹介がありました。

そのなかで印象的だった意見は次のことです。

- ・「多様性」は防災に大きく関わる
- ・妊娠初期の妊婦さんなど外見からは分からない人に気づく必要がある
- ・災害時でも子どもたちの居場所をつくる

特に災害時は学校が避難施設になることから、PTAが子どもたちに寄り添うことの重要性を痛感しました。

今回得た貴重な体験を多くのPTA役員に伝え、議論する機会を設けたいと思います。

(上小PTA連合会 会長 両角貴博さん)

《提言者》

●基調講演者

村岡 啓道 氏

独立行政法人国際協力機構 中国センター 所長

●実践発表者

横田 健司 氏

A I C World College 総校長

熊谷 優一 氏

A I C World College 大阪初等部校長

●コーディネーター

桑山 尚司 氏

広島大学大学院

人間社会科学研究所・異文化間教育推進室

／広島大学教育学部 講師

●パネリスト

村岡 啓道 氏

独立行政法人国際協力機構 中国センター 所長

横田 健司 氏

A I C World College 総校長

東川 勝哉 氏

公益社団法人日本PTA全国協議会 元会長

【基調講演】

「いつか世界を変える力になる ～求む！好奇心～」と題し、独立行政法人 国際協力機構(J I C A中国)所長の村岡啓道氏より基調講演が行われました。国際貢献を担う J I C Aの存在は知っていましたが、実際の働きやその思いなどをより深く学ぶことができました。

「日本国内にもさまざまな課題があるなかで、なぜ外国を支援しなければならないのか」という問いに対しは、「人道的理由」「恩返しの側面」「共創」があるとのこと。戦後荒廃した日本が経済大国となった背後には、多くの外国からの経済的支援があったこと。そして、それらによって高速道路や新幹線、あるいは学校給食なども支えられてきたことが語られました。今大会の会場が被爆地である広島だということを思うと、より価値のある話となりました。

「世界で活躍する人材」として特に強調されていたのは、以下の4つの力でした。

①知る力 ②聴く力 ③提案する力 ④実行する力

「子どもたちの可能性は無限大であり、その方向性を一方的に決めつけるのではなく、子ども自身が主体的かつ積極的に物事を体験し、知ることを通して、自分自身の中にある《何がしたいか》を見つけてほしい。そうして見つけたものを大事にして、それを実現すべく専門性を深めていくことが大切だ」と、メッセージを送っていました。

【実践発表】

バカロレア教育の目指す未来について、インターナショナルスクールのA I C World College 大阪初等部校長の熊谷優一氏より実践発表がされました。バカロレア教育についての基本的な説明も含め、ワークショップを中心とした発表であり、とても楽しく参加することができました。

ワークショップでは「のび太に最も悪影響を与えているのは誰？」として、しずかちゃん・スネ夫・ジャイアン・ドラえもんの中から、その理由も併せて選び出しました。会場では圧倒的にドラえもんが多数で、その理由として「のび太のやる気や自主性を阻害しているから」という意見には、会場から笑いが起こっていました。しずかちゃん・スネ夫・ジャイアン、それぞれを選んだ理由も挙げられていましたが、熊谷先生は「一つの答えを目指すのではなく、多様な答えがあることを知り、それらをより深めていくこと」の重要性を語られました。

また「5年後、10年後の教育のために、大人として何ができるのか」というテーマに対し、「問い」を通して子どもたちの思考を広げること、私たち大人は“良質な問い”を子どもたちに投げかけることが大切だと、話されていました。

次頁へ続く

【パネルディスカッション】

村岡啓道氏（JICA中国・所長）、横田健司氏（AIC World College・総校長）、東川勝哉氏（日本PTA全国協議会・元会長）の3氏によって行われました。

世界で活躍するために子どもたちに必要な力について、「あくまで英語（言語）はツールであり、それが上手に使えることが目的ではない。むしろ世界で活躍するためには《自分が何者であるのか》を自分自身が理解し、それを表現できることが大切」だと、まとめられました。

また、日本と世界の境目が薄くなっている現代において「グローバルとローカルをどう繋げていくか」「自分自身のアイデンティティ（国・言語・文化・風習等含む）を正しく理解しているか」これができるこそ、国際人として世界で活躍できるのだと、お話がありました。

また横田氏からは、バカロレア教育においてはPTAという組織・概念がなく、そこにあるのは学ぶ人（子ども）を中心としたラーニングコミュニティであり、周りの大人は子どもの学びや経験を手助けすることを大切にしているとのことでした。

つまりそれは「教える」のではなく、さまざまな課題や問題を解決できるよう、大人がどのように促してどのような質問をするのかにより、子どもの学びの質は変わるということ。子どもが答えに辿り着けるように大人が適切な問いをもってファシリテートすること、それが重要とのことでした。

【感想】

現在大学2年生になった息子とは、彼が小5～中1の間に「父子旅」と称して14カ国を旅しました。タイ・ミャンマー・カンボジアを皮切りに、インドや中国、ヨーロッパも巡りました。私自身は恥ずかしながら全く語学ができないのですが、親子で陸路国境を渡り、少々の危険を感じながらもリュックサックを背負って旅をしたことは大きな財産となっています。

そんなことを思い出しながら分科会に参加していましたが、前述のとおり、そこで語られたことは語学ができることよりも「自分が何者であるのか」を知っていることの大切さでした。

海外の人に比べ日本人はおとなしく、自己表現が苦手な人が多い印象です。しかし、海外に出たときに自分自身を正しく語れて、相手のアイデンティティも尊重することができる。そのような人材が今後ますます必要であり、また、教育としてそのような人材を育てていかなければならないと思いました。

子どもたちの可能性を私たち大人の狭い価値観に閉じ込めるのではなく、適切な問いと導きによって、子どもたち自らが感じ、学べるような環境をつくっていきたいと思います。そして、PTAとしてもそのようなメッセージを発信していきたいと思います。

（長野県PTA連合会 副会長 城村義人さん）

《提言者》

●基調講演者

塩田 真吾 氏

国立大学法人静岡大学 教育学部
学校教育講座 准教授

●実践発表者

高尾 裕子 氏

鳥取県PTA協議会 会長

●コーディネーター

塩田 真吾 氏

国立大学法人静岡大学 教育学部
学校教育講座 准教授

●パネリスト

安井 順一郎 氏

文部科学省初等中等教育局教科書課 課長

高尾 裕子 氏

鳥取県PTA協議会 会長

開地 義明 氏

広島市電子メディア協議会 会長

西田 文比古 氏

株式会社NTT E×Cパートナー
取締役 教育ICT事業部長

PTA活動では「子どもたちと保護者がひとつでも多くのことを体験し、共に学び成長できないか」を意識し、行動するように心がけております。広島大会でどのような内容の分科会を受講しようか悩んでいたところ、文部科学省協力による「創造性を育む教育ICT環境の実現に向けて」が目にとまり、この分科会を選びました。建設業に従事する私は、主に情報通信設備（電話・ネットワーク全般）をお客様に提案する営業をしているからです。

基調講演では「AI・ロボット時代を生き抜く情報活用能力をどう育むか ～家庭で『情報のリスクに対応する力』を育成するための3つのポイント～」と題して、静岡大学教育学部 学校教育講座 准教授の塩田真吾先生が講演されました。情報のリスクに対応する力を育成するポイントとして、次のようなお話がありました。

【情報のリスクに対応する力を育成するポイント】

💡ポイント① さまざまなトラブルへの自覚を促す

《自画撮りトラブルへの自覚》

はじめに、自画撮り写真を送ってしまいそうなシチュエーションを想像させます。

(例：好きな先輩から「顔は出さなくていいから下着の写真を送って」と言われた)

そして「どんな人に、どのように」送ってしまう可能性があるかを「場面強制想像法」を用いてイメージしていきます。同時に断り方も考えさせます。

未熟な子どもたちは好奇心で送ってしまう恐れがありますが、保護者と一緒に考えることで断り方も学んでいきます。

💡ポイント② リスクをグラデーションで考えさせる

SNS上で自身の情報を、どこまで教えたり公開したりしていいのかわかり、相手の特徴（名前や職業、家族構成、趣味など）から想像して考え、答えを導き出します。

情報を教えたことによりどんな危険が潜んでいるかなどを同時に考え、判断する能力も養います。

💡ポイント③ 時間管理に関する自律の力を育てる

24時間のタイムマネジメントの力を高めるといえることです。タイムマネジメントとは、目標やタスクを明確にして優先順位やスケジュールを設定し、実行と検証を繰り返すことをいいます。タイムマネジメントを行うことで自律心が芽生えます。

子どもたちには好きなことや夢中になれることを広げる行動、環境、感情などさまざまな体験をさせ、保護者も一緒に学ぶことが大切だと、講演を聴いて思いました。

次頁へ続く

実践発表では「とっとり子どもサミット～メディアとの理想的な付き合い方を考えよう～」を演題とした、鳥取県PTA協議会 会長の高尾裕子氏のご講演を拝聴しました。

GIGAスクール構想のスタート時、子どもたちと保護者が電子メディアとの適切な付き合い方を正しく学び、研究集会や講習会を通して使い方のルール作成などの成果に結びついたという発表でした。

長野市PTA連合会でも「研修会」「親の会」といった研修事業を7つのブロックで行っております。他県でもこのような取り組みを行い、子どもたちをはじめ保護者に向けて、また、内容によっては地域や企業といった皆様へ情報発信しております。

最後にパネルディスカッションによる研究課題の討議がされました。

フリートークに近い内容で、我々参加者からも建設的な意見や質問が活発に飛び交いました。「学びの変革」において、デジタル端末は鉛筆やノートと並ぶマストアイテムのひとつです。ICT学習の推進は、今後Society 5.0時代を生きる子どもたちにとって必要不可欠なものとなります。多様化する社会を力強く生き抜く子どもたちのために学校や行政、地域等と力を合わせ、子どもたちと保護者が共に学び共に成長できれば幸せなことではないでしょうか。

※Society 5.0：サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会。
狩猟社会(Society 1.0)、農耕社会(Society 2.0)、工業社会(Society 3.0)、情報社会(Society 4.0)に続く、新たな社会を指すもの。



広島大会を通じて、学びの機会を与えていただいたことに感謝申し上げます。

(長野市PTA連合会 副会長 江口康人さん)

●全体会記念講演

心のトリセツ ～「逃げ癖」を「意欲」に変える脳科学～

黒川 伊保子 氏

株式会社感性リサーチ 代表取締役
人工知能研究者、感性アナリスト、随筆家
日本ネーミング協会理事、日本文藝家協会会員

8月25(金)・26日(土)に行われた広島大会。新型コロナ5類への変更後初、全国のPTA会員が参集しました。

26日は広島県立総合体育館（広島グリーンアリーナ）にて全体会が開催され、全国から集まったPTA役員、広島県で活躍されているPTA関係者の合わせて約7000人規模での盛大な大会となりました。

開会前は歓迎アトラクションがあり、地元の子どもたち（広島ジュニアマリンバアンサンブル）による演奏で会場も盛り上がり、子どもたちの生き生きとした姿を見て、改めて子どもの持つエネルギーのすごさや表現力、未来へ向かっていくための躍動感を感じることができました。

開会宣言から始まり、新たに日本PTA全国協議会の会長になられた後藤豊郎氏の挨拶、来賓からご祝辞をいただき、次の第72回大会開催地、神奈川県川崎市への大会旗引継ぎも行われ、全国PTA会員を支えていくためのバトンが無事つながりました。

開会行事終了後は、記念講演となりました。「心のトリセツ ～『逃げ癖』を『意欲』に変える脳科学～」を演題にした、人工知能研究者の黒川伊保子氏による講演を拝聴させていただきました。

黒川氏は、人工知能AIについて長年取り組んできました。そのなかで人間の脳について非常に研究されたそうです。実体験を交えてのユニークな講演では「人の脳には2種類しかない」という話に興味をもちました。

「指先型(プロセス型)」と「手のひら型(問題解決型)」の2種類ということですが、どのように見分けるのか？意外にも、ペットボトルの開け方でわかるみたいです。開栓するとき、無意識に「指だけの力で開けている」または「手のひらをつけて開けている」、その違いでわかるみたいです。

脳の種類のどちらか片方だけでは偏りが出て、さまざまな場面での問題解決・対策に時間がかかってしまいます。2つの型で補っていくことが、さまざまな問題をスムーズに解決していくための一番よい方法だと、学ぶことができました。

私自身は「手のひら型」でしたので、「指先型」を見つけるように常に心がけていきます。皆さんも、周りの方のペットボトルの開け方に注意してみてください！（納得できます）

もう一つ「話し方」について、参考になる話がありました。それは「まず相手に共感してあげてから、自分の意見を話す」ということです。

普段の会話では、自分のことや結論を先に出してしまいがちです。まずはじめに共感してから話すことで、相手の脳が非常に気持ちよくなって会話がスムーズに進むそうです。これを実行するには自分自身の忍耐がとても必要とのことでしたが、これからまだまだ続く子育てにおいては非常に大切なことだと思い、ぜひ心がけていべきだと腑に落ちるお話でした。

講演会終了後、閉会行事が行われました。広島大会においての大会宣言が会場全体の盛大な拍手をもって承認され、第71回日本PTA全国研究大会 広島大会は幕を閉じました。

今大会のテーマ「変化の時代に向け、PTA自身が学びの変革を！～見つけ 考え かわろうや ぶち楽しいで！！～ 広島から全国へ」を発信できた大会であったと思います。この気持ちや経験を一人でも多くのPTA会員へ届けるため、長野県PTA連合会としての役割とあり方を再認識した素晴らしい大会でした。

(長野県PTA連合会 副会長 山田直幸さん)